

「有終の美を飾りたい」

「ノアの箱舟」についてはキリスト教徒でなくとも知っている方が多くいるかと思いません。英語圏に限らず最近では日本人にもノアという名前の子がいます。皆さんの知り合いの中にもそんな人がいるかもしれません。おそらく彼らの親はこの聖書に記されているノアにちなんでその名前をつけたのでしょう。普通、我が子に名前をつける場合、その名前には親の祈りと願いがこめられています。イエス様を売り渡したユダとか、今朝も使徒信条で唱えました「ポンテオピラトにより十字架につけられ」というピラトという名前をもつ人に私はこれまで出会ったことがありません。これらのことを考えます時に、私達の周りにノアと呼ばれる人がいるということは、聖書に登場するノアには評価されるべきものがあつたということになりましょう。そうです、聖書はノアについてこう記録しています。

『ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であつた。ノアは神と共に歩んだ』(創世記6章9節、10節)。このことゆえに神はノアとその家族に箱舟を作ることを託したのです。さらにこのノアの生涯を総括してヘブル11章7節はこのような言葉を残しています。『信仰によって、ノアはまだ見ていない事からについて御告げを受け、おそれかしくみつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となつた』。今日はそんなノアに注目していきたいと思ひます。

ヘブル11章の7節を見ます時に、ここには「ノアはまだ見ていない事からについて御告げを受け」と書かれています。すなわち、まだ彼自身の身に起きていないことについて、彼は神からの御告げを受けたのです。

私達の世界は目に見える多くの物で満ちています。その中には実際に触れることができるものもあれば、見ているだけで触れることができないものもあります。そして、私達の心はこの目に見えるものによって左右されます。ノアはまだ見ていないことについて神様から御告げを受けました。そう、それはやがて大雨が降るというメッセージでした。

しかし、ノアが神様の御告げを受けた時、彼の前に大雨は降っていませんでした。それどころか彼がいた土地を思えば、それはどちらかといいますと乾燥した風土でありました。そんな土地を来る日も来る日も見続けていた彼にとりまして、大雨が降るということはおよそ考えられないことでした。ましてやその雨たるや、巨大な舟が浮かぶほどのものだと言われても当然、実感はないのです。しかし、彼は神様の言葉を受け、木を切り倒し、箱舟を造り始めたのです。

私達は「信仰者」です。信仰者とはその字が示すように、信じて仰ぐ者です。信仰者とは目に見えるものだけで、それが全てだと判断しない者です。見ていないものを見ていくのごとく、歩む者を信仰者というのです。見えるものが最悪に見えても、天を仰ぎ、天の扉が開かれて、そこから光が注がれていることを信仰をもって見る者が信仰者です。

「バイリンガル」とは一つの言語だけではなく、別の言語をも話すことができる人と言います。このことによりその人は二つの文化を知ることができます。このことがどんなに大きな祝福であるか、言うまでもありません。ここにいらっしゃる皆さんはこの祝福を神様からいただいています。

同じように、私達はひとつの世界だけを見ているのではなくて、もう一つの世界を信仰をもって見ながら生きる者です。これは一度の人生で二つの世界を生きているようなことです。二つの言葉を理解し、同時に二つの世界を見るということ、このことは私達の人生を深いものとしてくれます。

今日の聖書箇所によりますとノアは恐れかきこみつつ、家族を救うために箱舟を造りました。結果的にこのノアの信仰と決断は人類がこの地から絶やされてしまうことを食い止めたのですが、聖書は「世界を救うために」ノアはこの箱舟を作ったというのではなくて、彼に一番、身近であった「家族を救うために」その箱舟を作ったと書いています。そうです、「家族を救う」ということは、すなわち「世界を救うこと」でありました。一つの家庭は小さなものです。しかし、私達の家庭が救われていくということがこの世界の救いとなります。

こうして雨など降る気配もない場所で、ノアはその家族と共に巨大な箱舟を造り始めました。当初、ノアは彼が神様から受けた御告げをその土地の者達にも語り、彼らもこの箱舟造りに加わるように勧めたことでしょう。しかし、この箱舟造りに携わったのは彼と彼の家族、八人だけでした。ノアの家族も信仰をもってノアを支え続けたのです。ノアの信仰を家族は継承していました。ノアが見ているものを家族も共に有したのです。

今日、私達を取り巻く世界は忙しくなく、その忙しなさは家庭の中にも入り込み、私達は互いのことを思いやることすら難しくなっています。互いにバラバラで、家族が同じものを見ているというよりも、それぞれが別々のものを見ているように感じることも多いのです。このような状態で家族を一つにするためにすべきことはたくさんあることでしょう。しかし、その中で最も大切なことは、同じ信仰の目をもって生きることなのだと言聖書は語るのです。

子供はしばしの間、親の保護と指導のもとにあります。しかし、やがていつか自分の足で好きな所に行く日がきます。自分で自由な所に行き、好きなことをすることができるようになったら、もう親はどうすることもできなくなります。かつての私達もそうだったと思います。その時にその子達が人生の荒波を生きていく力は見えないものを見ていく信仰なのです。

想像してみましょう。ノアが箱舟を作っている日々、空を見上げて雨も降る気配がない、そんな年月が続きます。それでもノアは箱舟を造り始めました。その間には家族会議なるものもあり、本当にこのことに意味があるのだろうかなどという疑念の思いもあったかもしれません。この家族がしていることは街の噂となり、人々は彼らをあざ笑ったに違いありません。しかし、ノアとその家族はその手を休めなかったのです。私達の私達の子供達もノアと同じようなことを必ず経験する時がくるでしょう。そう、目の前に繰り広げられている現実打ちのめされてしまいそうな時です。しかし、私達はその現実を見つつ（そうです、私達は現実から逃避する者ではありません）、信仰によって一つ一つの事柄をくぐりぬけていくのです。

聖書はその時代の人々について『人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりである』（創世記6章5節）、また『時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた』（創世記6章12節）と記しています。

そのような時にノアは「おそれかこみつ」この神の言葉に従いました。この一言にノアが毎日をどのように過ごしていたのかということをお話しますように、ここに記されている「おそれ」は「恐怖」ではなく「畏怖」の畏れということです。そうです、ノアは目には見えない、しかし確かに全地に在る神の存在を信じ、意識し生活をしていました。そして、その神への畏れがノアとその時代に邪悪に生きた人達を区別する要因となっていたのです。

私はこのノアの生き方を黙想してしまして、とても人間的な言い方になりますが、彼の生き様というものにとっても魅力を感じました。なぜでしょうか。彼が自分の信念を貫いて生きたからです。

なぜ、そのような思いを私は持ったのでしょうか？それは、私が日本人のメンタリティーを持っているからです。どちらかというと、私達日本人は他国の人達に比べて、常に周りの人達が自分をどう見ているのかということに気をつけて生きている者だからです。自分自身を振り返ってみてもそう思います。

そう、いったいどれだけの人が自らの人生に対して確固たる信念を持っているでしょうか。否、そんなことを考える時間もないのかもしれませんが。いったいどれだけの人が「我、ここに立つ」、「我、ここに属す」というものを持っていることでしょうか。もしかしたら、私達は揺れ動く世の中の動向や、人との比較によってこれらの立ち位置をいつも決めているのかもしれませんが。こう考える人が多いからとか、今はそれがトレンドだからというようなところに自らを置くのではなく、ノアのように自分の信念に立ち、そこに彼の家族も共にいたという生き方に私は強く惹きつけられるのです。

今、大統領選の真ただ中です。候補者は一人でも多く！と支持者を求めています。そうですね、それは数が多いか少ないかの戦いなのです。確かに私達の主義主張に共鳴し、それを支持する人がたくさんいるということは心強いことでしょう。しかし、自らが立つ信念に関していば、それは数の問題ではありません。10人、否5人、否、自分の信念を理解し共に立っている人が一人いるのなら、それは私達にとりまして何にも代えがたいことなのです。イエス様が自らの信念に立ち、十字架を担われた時、そのイエス様を理解した人間は一人もいなかったのですから。

ここには箱舟を造るノアとその家族の日々の生活の詳細は書かれていませんが、家族が一つとなって一つのビジョンに向かって毎日を過ごすということはチャレンジを伴うものであったでしょうが、そこには喜びがあったことでしょう。たとえそこに反対があったり、困難があったとしても、彼らの心には父なる神にある平安があり、やりがい、一致がありました。この時のノアとその家族は日々の生活を深く味わって生きていたのです。

このような年月が過ぎ去り、神様が言われたように大洪水が起こりました。彼らが苦労して作り上げた巨大な箱舟が荒れ狂う大水の上に浮いたのです。彼らはその箱舟の中で時を過ごしました。そして、雨はやみ、水で覆われていた土地がその姿を再びあらわしました。そう、箱舟から出る日がやってきたのです。その時、ノアは主に祭壇を築いて、すべての清い獣と、すべての清い鳥とのうちから、はん祭を祭壇に捧げ、まず神に感謝を捧げたと聖書は記しています。

40日40夜降り続いた雨と、止んでからも数ヶ月を船の上で過ごしたノア。そんな状況で箱舟の扉が開かれたら、皆さんならまず何をしますか。ノアはその時に神に感謝の捧げものをしたのです。はん祭とは、その捧げものを焼き尽くすやり方です。全てを焼き尽くすということは、ノアの神様への全き献身を意味したのです。

さて、ここまでお話ししてきました皆さんは思っているかもしれません。ちょっと待て

よ、このメッセージシリーズは「人生の危機管理」であって、このシリーズは聖書に登場する人間の失敗から学ぶということではなかったかと。

そうです、ご心配なく、私はそのことを忘れてはいません。ただ、ノアという人の人生を見ますと彼の人生には評価すべきことがたくさんあったのです。ですから、まずそのことを最初にお話したのです。しかし、箱舟を作り上げ、大洪水を免れ、神への感謝をまず第一とした後のノアについてこのような記録を創世記は残しています。

さてノアは農夫となり、ぶどう畑をつくり始めたが、彼はぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナン之父ハムは父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。

ノアは神様に託されたミッションを成し遂げました。そして箱舟がとどまった土地の周辺に定住したのでしょう。そこで農夫となりました。そうです、地に種をまき、そこから実りを得る者となったのです。地から生じる産物は神様の恵みでありました。その中にたわわに実るブドウがありました。彼が得たブドウの実はまさしく神様が彼に与えた祝福でありました。

その神の祝福にノアとその家族は手を加えました。そうです、そのブドウを発酵させ、それをブドウ酒とする術を彼らは見出したのです。神がくださる大地の恵みであるブドウがノアを愉ませる味わい深い飲み物となりました。今日のワインの歴史はこのようにとても古いのです。以来、ブドウ酒は聖書の中に何度も出てきます。イエス・キリストの最初の奇跡は結婚式において水をワインに変えるものでしたし、最後の晩餐においてブドウ酒をもって、イエス様はご自身が十字架上で流す血を弟子達に言い表しました。

聖書はワインを飲むことを禁じておりませんし、実際にワインそのものには何も問題はありません。しかしノアはその神の祝福を正しく用いることに失敗しました。そう、ノアはブドウ酒に酔い、その影響でしょうか、彼は身にまとうものなく、醜態をさらして、酔いつぶれてしまったのです。

聖書を読んでいきますと人がある土地に定住して、その生活が安定しますと気が緩むのでしょうか、このような過ちを犯してしまう傾向を読み取ることができます。神に愛されたあのダビデが一生の大失敗をしたのは成功を収め、名をあげた安泰の時でした(サムエル下11章)。そう彼の人生はそのほとんどが神の前に真実に生きた日々だったのです。しかし、その日はある時、普通に彼が生活している時に起きたのです。そのことにより後に彼は涙をもって償うことができないような刈り取りをしなければならなくなりました。使徒パウロが『立っていると思うものは、倒れないように気をつけるがよい』

(1コリント10章12節)と書いていますように、私達が大丈夫、問題は何かもないというような時に、実は私達は最も足がすくわれやすい状況にいるのです。

ここまでお話ししてきましたように、ノアは神に評価された人でした。そのことに異論はありません。従順こそが彼の人生を導くものでありました。しかし、彼の晩年、彼はどうか第一に神に寄り頼み、そこから慰めを得るのではなく、酒により頼み、そのことによって自らを慰める習慣を得てしまったのです。

このノアの醜態に対して彼の息子達は異なる対応をしました。ハムは父親の姿を兄弟達に言いふらしました。かつてはノアの信仰に従っていたハムもその父に対するリスペクトを失ってしまったのかもしれませんが。このハムに対して他の二人の息子、セムとヤペテとは着物を取り、肩にかけ、後ろ向きに父ノアに歩み寄り、父の裸をおおい、その裸を見ようとはしませんでした。このことはまた後日、お話ししますが、このことゆえにハムとその子孫にまで悲しむべき影響が起きていく様子を聖書は書き残しています。

それまでのノアの人生が神によみせられる人生であったにもかかわらず、その最後の最後になって、ノアは失敗を犯し、そのことが我が子とその子孫に深刻な影響を与えることとなったのです。創世記を書き記したのはモーセだと言われていますが、彼はこのノアの生涯というものを口伝で聞いていたのでしょうか。彼が神と共に歩んだ人生を順をおって注意深く書きながら、このノアの出来事にいたったことでしょうか。このようなことを書き残すべきなのか、それともやめておくべきなのか(書き残さないということは、このノアの失敗は後世の者達には全く隠されたものとなることを意味します)。そんなことをモーセは悩んだかもしれない。しかし、神の霊は彼の手にも力強く臨み、彼はこのことを書き残したのです。思えば聖書とはそのような書物で、モーセであっても、アブラハムであっても、ヤコブであっても、ダビデであっても、エリアであっても、ペテロであっても、パウロであっても、彼らの神に対する従順と共に、彼が陥ってしまった失敗を見落とすことなく書き残しているのです。そして、それは何のためであったのかということをおもいます時に、言うまでもない、それは後に生きる者達のため、すなわち私のためであり、あなたのためであるということに気がつかされるのです。

パウロという人はよく陸上競技を譬えにして真理を語りました。既に当時、オリンピックのような競技があり、パウロはそのようなスポーツを観戦すること、いや、もしかしたら自らもその競技に参加することを楽しんでいたのかもしれませんが。その中から信仰につながる真理を見出したのかもしれませんが。彼はこう書いています。

「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をす

る者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」 (1コリント9章24節-27節)

私達はこの彼の人生から教訓を得ます。ここには賞を得るように走りなさいとありますので、人生のレースは順位がつけられるような競争のようにも思われます。しかし、実際のところ私達の歩むべき道は競争ではなく、それは私達が賞を得ることができるように自ら節制をして臨むものであり、その最終的な目標は完走することなのです。そのゴールにいたるためにパウロ自身、自分は時に自らを打ち叩いて走り続けるのだということです。なぜなら、他人ごとではなく自分は失格者になってしまうかもしれないからだということです。主にある兄弟姉妹、このような思いを彼はどこから得ていたのでしょうか。そうです、彼の手元にありました、私達が今朝、見てまいりましたような古の聖徒達の失敗から彼はこのような慎重さを獲得したのです。彼は思ったのでしょうか、彼らが陥った失敗は他人ごとではなく、私自身も今日、犯しかねないことなのだ。

ノアは当初、よく節制し、家族の模範になるかのようにしてその先頭を走っていました。しかし、いよいよそのゴールが近くなりました時に、失敗してしまいました。全ての人々がノアと同じ失敗を犯すということはありませんでしょう。しかし、「ブドウ酒」に代わるような思いがけないものによって、私達はこれまでの主との歩みを台無しにしてしまうようなことがこれからあるかもしれません。誰一人としてノアのような失敗をしないと断言できる人はいないのです。

人生は最後の最後まで分からないのです。私達は順位を競いません。しかし、確かにその人生を主と共に完走することができることを願わない人はいないでしょう。「臆病」という言葉はあまり肯定的なものではありません。しかし、この点において私達は自分が何をしでかすか分からないという「慎重さ」を持ちましょう。これらのことを創世記は「ノアは神を畏れかしこんで生きた」と言っているのです。キリストにあって有終の美を飾りましょう。私達の余生がどれだけあるのかということは神のみぞ知ることです。その人生、私達は神を畏れかしこみつつ、神と人に愛されて日々を過ごし、主イエスが迎えてくださるゴールのテープを切る者でありたいのです。お祈りしましょう。